

Newsletter

2010 March No. 11



Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility

Contents

卓越の条件 Conditions for excellence.	1
第3回グローバル COE 共催シンポジウム 子どものこころの発達と教育 ～最新の研究成果に学ぶ～ Development and Education of the Children's Mind: Suggestions from the Latest Studies	2
慶應義塾大学 言語教育シンポジウム 「ことばの力を育む」授業の展開 ～みんなで探ろう、小学校の英語活動への 対処法～ Keio University Symposium on Language Teaching: How to Develop Students Metalinguistic Awareness through Foreign Language Activities in Elementary Schools	3
認知心理学会のフロンティア： 公開シンポジウム I 「裁判員裁判における理性と感性：裁判長、 直感で決めてもいいですか？」 Logic and Sensibility in Trials with Lay Judges	
GCOE 国際シンポジウム Evolution, Development and Education of Logic and Sensibility 1: Shedding Light on Developing Brain	4
第3回人間知性研究センターシンポジウム 「持続可能な社会システムの構築を目指して」 Toward Sustainable Social Systems: Phase transition–Evolution–Polysemy	
Kant's Transcendental Idealism in Focus カントの超越論的観念論についての 集中講義	5
国際シンポジウム・研究セミナー 「映像記録とアートの感性」報告 Emotion in Ethnographic Filming	
平成 21 年度プロジェクト科目 年度末報告会 Project Course	6
活動報告	7
研究員紹介・事務局だより	8

卓越の条件

Conditions for excellence.

茂木健一郎

Ken Mogi Sony Computer Science Laboratories, Inc. Senior Researcher



「学問的卓越の中心」というものは一体どのようなものなのか、時々考える。

私にとって一つのモデルになるのは、留学していたケンブリッジ大学である。ものすごくアタマのいい人が揃っていて、熱心に議論していた。カレッジのハイテーブルでは、専門にかかわらず人々が討論していた。あの雰囲気は、間違いなく学問的卓越の一つの中心であったと考える。では、そのような状況はどのように作ったら良いのか、その条件を考えてみたいと思う。

まずは、志を同じにする人が集まって、一つの「臨界密度」に達しなければならないだろう。ある特定の相手としてこく議論するのも面白いが、時々新鮮な刺激が必要となる。継続されていくものと、不断に更新されていくもの。それらが入り混じった状況が作られることが肝心。すなわち、「偶有性」である。

ここに言う「志」は、学問的自由とその追求について、妥協を許さない精神でなければならない。日本では、残念ながら人を組織や肩書きで判断する傾向が未だにあるが、それでは臨界密度が作れない。たとえ、何らの組織に所属しない独立研究者（インディペンデント・スカラー）でも、その人の学問的知見が傾聴に値するものならば、よほど仲間に受け入れなければならないのである。

次に、「多様性」がなければならない。「学問」とはつまり化学反応のようなもの。異なる要素が結びつき、融合することで初めて新しいことが生まれる。均質なもののばかりでは、いくら組み合わせても変わり映えがしない。異論反論大いに結構。そもそもの専門性を含めて、異なる傾向の人たちが一堂に会さなければならない。

多様性が大切であるということは、すなわち、一つの「生態系」のようなもの。そうして、学問の多様性を育むためには、環境がある程度継続して保たなければならない。

地球の生物を見ると、赤道までもが凍結したとされる「スノウボールアース」状態から気温が 100℃ 上昇し、現生生物のひな型がほぼ出そろった「カンブリア爆発」以降、ほぼ一貫して多様性が増え続けている。

地球上でもっとも豊かな多様性を示す場所の一つ、東南アジアの熱帯雨林は、同時に地球に現存する最古の生態系の一つである。多様性を育むためには、一つの環境がある程度長く保たなければならないのである。

ケンブリッジ大学は、2009 年に創立 800 年を迎えた。英国における一方の雄であるオックスフォード大学は、ケンブリッジ大学に先駆けて創立されている。だから、オックスフォードの人たちは、ケンブリッジのことを揶揄して「ニュー・ユニヴァーシティ」（新しい大学）と呼ぶのだそうである。いずれにせよ、どちらも大変古い歴史を持っている。だからこそ、学問的な臨界反応を引き起こすだけの多様性を育むことができた。

一方、日本の大学は、創立が 1858 年にさかのぼる慶應義塾大学でも、まだ 150 年余りである。多様性という視点から見た日本の大学の学問的充実は、まだまだこれから先のことと言えるだろう。

何よりも大切なのは、継続性。短期的な学術振興策だけでなく、中長期にわたって、同じ志を持つ人たちが集って切磋琢磨できるような息の長い政策が求められる。日本の大学が、さまざまなエキゾチックな学問的植物が生え茂る熱帯雨林のような場所になることに期待したい。

Here I discuss the conditions for building a center of excellence in academic pursuits. A critical mass of people aspiring for a common goal should be reached, where the chain reactions would bring the innovations. A sustainable environment of research should be maintained, in order to nurture the necessary ecological diversity, as in the case of tropical rainforests. As an example of venerable centers of excellence, the Cambridge and Oxford Universities in the United Kingdom are examined. Based on these reflections, I propose some general directions for the science policy of this country to flourish in the future.

子どものこころの発達と教育 ～最新の研究成果に学ぶ～

Development and Education of the Children's Mind:
Suggestions from the Latest Studies

(1月9日 三田キャンパス西校舎 519 教室)

2010年1月9日「第3回グローバル COE 共催シンポジウム 子どもたちの発達と教育 ～最新の研究成果に学ぶ～」と題するシンポジウムが京都大学・慶應義塾大学グローバル COE 共催で開催された。「論理と感性の先端的教育研究拠点」拠点リーダー渡辺茂教授（慶應義塾大学）の挨拶と開催趣旨説明の後、京都大学と慶應義塾大学のグローバル COE での取り組みや成果について「心が活きる教育のための国際的拠点」拠点リーダー子安増生教授（京都大学）が発言した。発達障害のある乳幼児、児童への応用行動分析学を軸にした発達臨床研究を進めている山本淳一教授（慶應義塾大学）による司会進行の下、各発表者より話題提供が行われた後、現場での臨床実践を行っている伊藤美奈子教授（慶應義塾大学）による指定討論、発表者と会場との全体討議によるシンポジウムが行われた。その後、東館交流室で事後検討交流会がもたれた。今回のシンポジウムは、発達と教育をめぐる行われてきたグローバル COE の最新の研究成果を、一般の方にもわかりやすく伝えるとともに、子育て、学校教育などの現代の問題についても討議を行うことを目的とした。会場には、学生から一般の方々まで多くの聴講者が足を運んだ。

比較認知発達科学が専門である明和政子准教授（京都大学）は、「ヒトらしい心とは～心の発達と教育の進化的基盤～」と題する講演で、ヒトらしい心が「いつ、なぜ、どのように」芽生えるのかについて、発達と進化の観点から取り組むことの提案や、模倣・共同注意・共感性の能力をヒトとチンパンジーで比較することによって見えてくるヒトとチンパンジーの多様性に言及しながら多くの研究成果を紹介した。ヒトとチンパンジーの赤ちゃんの心の発達を比較すると、生後しばらくは共通する部分が多いが、そのあとの道筋はそれぞれの種特有の環境に適応したものへと方向づけられていくことに触れ、その中で、人間社会の「おせっかい」な環境がヒトを進化させてきた要因ではないかという洞察を示した。

乳幼児の脳機能を非侵襲的に測定できる Near-Infrared Spectroscopy (NIRS) を使った研究を行っている皆川泰代特別研究准教授（慶應義塾大学）は、「赤ちゃんの脳を見る～コミュニケーション能力の育ち～」と題する講演を行い、NIRS 測定の方法論から乳幼児の言葉の聞き取り、さらに乳児と母親のコミュニケーションにおける脳活動の測定によって、自分の母親、自分の子供が特別な存在であることを紹介した。近年、脳画像技術の目覚ましい進展によって、赤ちゃんの発達と脳機能についての発見が相次いでいる。その中で、乳幼児の研究を積み重ねることが発達障害児の早期発見に役立つことに触れ、次世代イメージング研究の展望を示した。

双生児法を用いた実証研究に取り組んでいる安藤寿康教授（慶應義塾大学）は、「ふたごから見るヒトのこころ～社会性と認知の発達～」というタイトルで講演を行い、双生児研究の方法論や遺伝と環境の交互作用について、教育との関係から研究成果を紹介した。その中で、遺伝の普遍性、共有環境の希少性、非共有環境の優位性

という3つの双生児研究の柱が存在することを示し、遺伝要因と環境要因の関わりからヒトの社会性と認知の発達を考えていくことを提案した。

学びの援助という視点から教育システムの分析と構成を行っている松下佳代教授（京都大学）は、「学びを評価する～パフォーマンス評価の試み～」と題する講演を行った。ある特定の文脈のもとで、さまざまな知識や技能などを用いながら行われる、その人自身の作品やふるまいを直接的に評価するパフォーマンス評価を、小学校6年生の算数において実践したものについて紹介した。その中で、パフォーマンス評価は、学習者の学びの促進や教員の専門成長のために用いることを提言し、これからのパフォーマンス評価の可能性について述べた。目には見えない子どもたちの学びそのものをどのように評価するのかという難しいテーマであったが、今後の評価の在り方についての展望を示した。

これらの講演の後の指定討論では、伊藤美奈子教授（慶應義塾大学）が自身の臨床経験を踏まえて発表者との意見交換を行った。全体討論では、会場と発表者との間で議論が活発に交わされた。

今後とも、京都大学と慶應義塾大学との交流を深め、お互いの研究成果を社会に還元するシンポジウムとして、ますます発展することが期待される。
(今福理博)

On the 9th of January, 2010, the third joint GCOE symposium of Kyoto-Keio University was held at Keio University. The title of the symposium was “Development and Education of the Children's Mind: Suggestions from the Latest Research”. Four researchers from two GCOEs reported their latest studies on human evolution and development, genetic and environmental factors of development and assessment methodology of education. This symposium was open to the public, students as well as researchers to discuss the recent problems such as childcare and school education.



「ことばの力を育む」授業の展開 ～みんなで探ろう、小学校の英語活動への対処法～

Keio University Symposium on Language Teaching:
How to Develop Students Metalinguistic Awareness through
Foreign Language Activities in Elementary Schools (2009年12月19日 日吉キャンパス独立館 DB201)

去る2009年12月19日に慶應義塾大学グローバルCOE言語教育シンポジウムが開催されました。シンポジウム当日まで申し込みが相次ぎ、教室はほぼ満員の大盛況で、冬の寒さを忘れるほど会場は熱気に満ちていたのが記憶に新しいところです。

今回のシンポジウムでは、「理論」に裏打ちされた言語教育の「実践」がその主要なテーマでした。これまで、言語教育プロジェクトでは、その先導的立場にある大津由紀雄教授（慶應義塾大学）を始め、各研究分担者は様々な形で、日本における言語教育の重要性を訴えて来、例えばウェブ上で、プロジェクト言語教育の活動の経過報告という形で、その研究内容を間接的に伝えてきました。しかしながら、では実際にその言語教育という理念を、具体的な授業の形に落とし込む場合はどうすれば良いのかということに関しては、機会に恵まれず、どうしても「理論」の部分に議論が偏りがちでした。そのため、今回のシンポジウムでは、「実践」を前面に押し出し、現場経験の豊富な教員が行った授業ビデオの放映や、具体的なワークショップが行われました。

今回のシンポジウムでは、授業実践ビデオの放映を通して、現場の先生方には「ことば」の授業における、子どもたちの無限の可能性をその目で見え、さらには、その後続く、各授業者の授業解説、そして、ことばの専門家、つまり言語学者による、授業の背後に隠された原理の解説によって、「言語教育」とは何かを、まさに「理論」と「実践」の両面から理解していただきました。シンポジウム後のアンケートは、「言語教育の具体的な姿が分かり、その可能性を感じた。」という言葉や、「実践がしっかりと理論に裏打ちされているので、説得力があったと思った。」など、実際に多くの先生方の心を揺さぶることができたことを示しています。

我が国の新学習指導要領によって必修化された、小学校高学年での外国語活動は、実質的に予算もなく、方法論もないというある種の危機的な状況に置かれています。しかし、その危機というのは、一体誰にとっての危機なのでしょう。外国語活動を、きちんとした教育政策として考えられる前に導入したことで、現在その対応に追われている行政でしょうか。それとも、方法論がなく、明日の授業をどうしようと悩んでおられる現場の先生方でしょうか。いや、違います。それは、日本の未来を背負う子どもたち自身にとっての危機に他なりません。彼らには何の罪もなく、今回のような事態になってしまったのは、ひとえに国の教育政策に対する浅慮、それはつまり、教育政策に携わる人々の「ことば」の重要性への意識の低さが原因ではないでしょうか。福澤諭吉先生が正しく述べているように、「教育は国家百年の計」です。グローバル化経済への対応のための早期外国語教育という、恐ろしく単純な議論、そして何よりも目先の利益を重視した視点によって、日本の学校教育が考えられていること自体、大きな問題と言えるでしょう。

こんな状況下において、現場の先生方に期待したいことは、外国

語活動は誰のための活動であるかということをもう一度考えていただき、その上で、例えば、決まり文句としての英語表現を次から次に教え込むのか、あるいは、外国語活動を言語教育として捉えなおし、「ことば」の授業を通じて、子どもたちにことばの大切さに気づかせるのかなど、ご自身で判断を下すということです。

「ことば」は、深く、面白く、人間にとって大切なものです。この「ことば」に対する意識を高める教育は、子どもたちの将来の学びを支えるでしょう。また、今回の実践で明らかになったように、ことばの授業では、子どもたちは夢中になります。そして、これらの授業は、きちんとした学問的基盤によって裏付けられています。あとはこれをカリキュラムとして体系化し、教材を開発していくということですが、これについてもすでに準備は整ってきております。今後、カリキュラム・教材ということで、言語教育プロジェクトにおいて、現場にいらっしゃる先生方からのフィードバックがとても重要な役割を担ってきますが、子どもたちのための新たな外国語活動、つまり「子どもたちのための言語教育」の創出に向けて、現場と研究者が一体となって研究プロジェクトが進められていくことが期待されます。（永井敦）

The Keio University Symposium on Language Teaching was held on December 19, 2009. It mainly focused on how to develop the “metalinguistic awareness” of children, an ability which promotes their effective language use. We had almost 300 participants, who were mostly school teachers. In this symposium, we demonstrated that our theory of language teaching can be put into practice in classroom situations. For example, the participants observed the practices through a video and attended some workshops. Finally, they seemed to have understood not only the theory of language education but also the concrete methods of it. So from now on, we can expect them to develop their own practices and provide us with feedback.



認知心理学会のフロンティア：公開シンポジウム I

「裁判員裁判における理性と感性：裁判長、直感で決めてもいいですか？」

Logic and Sensibility in Trials with Lay Judges

(1月16日 三田キャンパス北館ホール)

1月16日に、日本認知心理学会と共催で裁判員の判断に関するシンポジウムを開催した。昨年(2009年)より裁判員制度が実施され、8月からは裁判員が参加する裁判(裁判員裁判)が各地の地方裁判所において始まった。法律や裁判に関しては素人である裁判員が、裁判上の判断を的確に行うことは可能なのだろうか。本シンポジウムでは、特に、裁判員が直感に頼ったり、感情に流されたりすることによって、不適切な判断がなされることがないのか、という問題を取り上げた。

企画者の伊東からの問題提起に続き、綿村英一郎さん(東京大学大学院)と松尾佳代さん(慶應義塾大学大学院)から、自らのデータを中心とする報告が行われ、事件とは無関連であるはずの犯人や被害者についての情報、裁判員の感情を掻き立てるような情報が、実験参加者が裁判員になったつもりで下した判断に影響を与えることが指摘された。続いて、中村國則さん(東京工業大学)は意思決定の心理学の立場から、裁判員に合理的な判断、適切な判断ができるのかという問題を提起し、合理的な判断をしているとは言えないが、案外適切な判断をしているのではないかと、という見解を示した。高橋雅延さん(聖心女子大学)は記憶心理学、感情心理学の立場から、感情によって人間の記憶や判断が大

きく左右されることを様々な実験の例を示しながら論じた。

本シンポジウムでは法律関係のスピーカーの参加も得た。指宿信さん(成城大学)ほかが刑事訴訟法や法実務の立場から裁判員の心理を研究する必要があることを指摘した。いずれも公平な裁判を実現するためには裁判員の感情の働きなどについての理解に基づき制度を考えていく必要があることを指摘した。

最後にフロアも交えて討論が行われたが、裁判員裁判における理性と感性という問題が、応用的に重要であるだけでなく、基礎研究の見地からも興味深く重要な問題であることが示された。

(伊東裕司)

A symposium titled “Logic and Sensibility in Trials with Lay Judges” was held. Effects of emotion on and irrationality of latent lay judges’ judicial judgment were discussed.



GCOE 国際シンポジウム

Evolution, Development and Education of Logic and Sensibility 1: Shedding Light on Developing Brain

(1月30日 三田キャンパス G-SEC Lab)

1月30日、三田キャンパスにおいて開催された GCOE 国際シンポジウムでは、乳幼児の脳機能発達研究に取り組む国内外の研究者達が、近赤外線分光法(NIRS: Near-Infrared Spectroscopy)による脳機能計測装置を使って得た最新の成果を持ち寄った。皆川泰代特別研究准教授(CARLS)と森浩一氏(国立障害者リハビリテーションセンター研究所)による司会進行のもと、次のような話題が提供された(以下発表順)。

辻井岳雄特別研究准教授(CARLS)は、学童期の子どもが抗ヒスタミン薬(Ketotifen)を服用した際、記憶課題中の前頭葉の活動が低下する事を報告し、NIRS装置が薬理効果の評価に応用可能なことを示した。太田真理子研究員(CARLS)は、NIRS装置で計測した睡眠中の自発的脳活動(睡眠脳波に由来)が、十分に大きな振幅成分を持ち、刺激応答波形の再現性を低下させる可能性について報告した。Emmanuel Dupoux氏(フランス ENS)は、隠れマルコフモデル等の信号処理テクニックに基づく音声学習モデルの学習結果を、実際の乳児の発達データと比較する試みについて紹介した。Susan Hespos氏(Northwestern 大学)は、視覚タスク・運動タスク・聴覚タスクといった実験タスクの種類によって、NIRS装置で測った刺激応答波形やその発達的变化に差異があることを紹介した。直井望氏(ST-ERATO/京都大学)は、NICUという特殊な環境で育つハイリスク新生児の脳活動をNIRS装置で計測し、発話音声に対す

る反応を正期産新生児のそれと比較した結果について報告した。保前文高氏(首都大学東京)は、NIRS装置による多点計測データを使って生後0~6ヶ月の皮質間コネクティビティの発達を可視化するアイデアを報告し、月齢の増加とともに左右半球間の連絡が現れてくる様子を示した。

いずれの報告も、発達研究におけるNIRS脳機能計測の新しい応用可能性を示すものであり、今後の展開が期待される。同時に、これらの報告は、緒に付いたばかりのNIRS脳機能計測に解決すべき課題が多くあることも示した。全体を通してのディスカッションでは、方法論の標準化が期待される実情と新しい方法論の参入が期待される実情について話し合われた。(太田真理子)

The international GCOE symposium was held on Jan 30, 2010. Six researchers from Japan and abroad reported their latest studies on the neurocognitive development with NIRS (Near-Infrared Spectroscopy) technology.



第3回人間知性研究センターシンポジウム

「持続可能な社会システムの構築を目指して」

Toward Sustainable Social Systems: Phase transition—Evolution—Polysemy

(2009年12月14-15日 日吉キャンパス協生館藤原洋記念ホール)

人間知性研究センターは慶應義塾大学と、独立行政法人理化学研究所の包括協定に基づき、慶應義塾大学の先導研究センターの一つとして2009年に設立されました。慶應義塾側では前野、岡野、渡辺がリーダーを務めるグローバルCOE拠点がこのセンターに参加しています。

2009年12月14、15日にわたって「Toward Sustainable Social Systems: Phase transition—Evolution—Polysemy 持続可能な社会システムの構築を目指して：相転移—進化—多義性」という国際シンポジウムが、日吉キャンパス協生館で、サンタフェ研究所（米国）、ナンヤン工科大学（シンガポール）、パラリムス研究所（欧州）の協力を得て開催されました。これらの研究機関と人間知性研究センターの共通の基盤は、人間の知性とそれが生み出す社会を複雑系として捉えていることです。知性の神経基盤や進化といった話題からCO2排出といった問題、さらに各研究機関の活動や目的なども紹介されました。最後に今後ともこれらの研究機関が連携関係を保っていくことが確認されました。（渡辺茂）

The international symposium titled “Toward Sustainable Social Systems: Phase transition—Evolution—Polysemy” was held on 14th and 15th December, 2009 at Keio University. This is the third symposium of the Research Centre for Human Cognition.

Three foreign institutes: Santa Fe Institute (USA), Nanyang Technological University (Singapore), and Institute Para Limes (Europe), joined in the symposium and discussed the sustainability of our complex social system.



Kant's Transcendental Idealism in Focus

カントの超越論的観念論についての集中講義

2009年12月18日

三田キャンパス東館
セミナー室

21日

6F G-SECLab

Kant maintained that in order to know objects, there needs to be co-operation between the discursive and intuitive faculties of human cognition. Although this is one of his key doctrines, many commentators, including our guest Dr. Lucy Allais from the University of Sussex, UK are convinced that he is not just presenting an epistemology, i.e. a theory of knowledge, but also a metaphysical theory in that he makes claims about the fundamental structure of what there is. At the heart of this reading of Kant is his transcendental idealism.

Kant's transcendental idealism is as famous as it is controversial. According to Kant's official definition appearances are mere representations, and if there are appearances there must be things in themselves as well. Moreover, whereas appearances are spatio-temporal, things in themselves are not. There are basically two tasks Kant scholarship needs to accomplish: a) finding an interpretation which does justice to all the pertinent passages in Kant's works, and b) evaluating Kant's arguments for this position. In her first lecture, Dr. Allais was concerned with Kant's so-called direct argument for transcendental idealism. According to her, this argument proceeds in the pattern of an inference to the best explanation: What Kant wishes to explain clearly has to do with true mathematical judgments; but according to Allais it is not their justification, but how they can have ob-

jects or be about something in the first place. Her second lecture was concerned with the infamous doctrine of things in themselves; unlike many commentators she does not think Kant's claim is merely conceptual, i.e. that we have a concept of how things are in themselves; for her Kant is committed to something more robust, namely the claim that there really are things in themselves. This, of course, raises the question of the relationship between things in themselves and appearances; in her opinion there are not two separate worlds, but one world in Kant. (Wolfgang Ertl)

カントは認識論を提出しているだけでなく、存在の基本的構造についての形而上学的理論をも提示しているというのが、Dr. Lucy Allaisの主張であり、カントのこうした読み方の核心にはカントの超越論的観念論がある。これは、有名であるだけでなく、問題をはらむものでもある。Dr. Allaisは、初回の講義において、超越論的観念論への「直接的議論」について論じた。他方、二回目の講義では、物自体と現象の間の関係が論じられた。カントにおいては、二つの別々の世界が存在するのではなく、単一の世界が存在するというのが、彼女の意見である。（抄訳：鈴木康則）



「映像記録とアートの感性」報告

Emotion in Ethnographic Filming

(12月15日 三田キャンパス東館 6FG-Sec Lab・16日 同館 4F セミナー室)

2009年12月15～16日、哲学・文化人類学班の主催でサウス・カロライナ大学のKarl G. Heider教授をお迎えして2日間にわたり講演会が開かれた。チームリーダーの宮坂敬造教授(慶應義塾大学)が企画し、司会を務めた初日の公開シンポジウムは「映像記録とアートの感性」と題し、約140名の参加者を得て盛況であった。Loughborough UniversityのSarah Pink教授による“Walking, Anthropology, Art, and Documentary Practice”では、人類学者のフィールドワークと映像というアートフォームの関係が、歩くことでの身体経験を中心に論じられた。その後、Karl G. Heider教授による基調講演“Rethinking Emotion in the Ethnographic Film *Dead Birds*”では、映像人類学の代表作品である『*Dead Birds*』(1963年)のニューギニアでの現場撮影に関わったHeider氏が、過去の映像アーカイヴ作品の表現手法の信憑性を現在の視点から再評価し、「感情」の映像による異文化間伝達の可能性をめぐって、映像人類学の理論的考察を報告した。続く討論では、橋本順一氏(慶應義塾大学)が芸術批評、大杉高司氏(一橋大学)が人類学批判の観点を加え、感性の映像表現における政治性について熱い議論が交わされた。

二日目は、前日の課題をもとに「感情の人類学：映像からのアプローチ」をテーマに研究セミナーが催され、より専門的な討議が展開された。Heider教授は“The Significance of Anthropology of Emotion in Visual Anthropological Understanding”というタイト

で、映像人類学の「感情」への深まる関心を検討した上で、マッピングという自らの分析手法を詳細に紹介した。最後に、発表者新井一寛氏(京都大学)と、指摘討論者大石高典氏(京都大学)が、実際にフィールドで撮影する際に直面する感情の捉え方について方法論的な討論を行った。総じて2日間のプログラムは、映像人類学の原光景を振り返りながら、フィールド映像記録と表現の問題を、学術映像とアートの間に横たわる諸問題と突き合わせて、学際的な再検討を進める有意義な機会となった。(モハーチ・ゲルゲイ)

Organized by the Philosophy and Cultural Anthropology Group, a two day event was held at the Mita Campus of Keio University on December 15th and 16th 2009 focusing on the role of *Emotion in Ethnographic Filming*. Two fascinating lectures were given by pioneernig visual anthropologist Karl G. Heider (University of South Carolina) followed by a heated debate on the politics of visual representation at the public symposium of the first day, and an advanced seminar on methodological issues on the second day. The meeting surpassed all expectations with more than 140 participants.

平成21年度プロジェクト科目年度末報告会

Project Course

(1月30日 三田キャンパス大学院校舎 325B室)

平成21年度のプロジェク科目履修者は13名である。そのうち、少なくとも3名は共同研究で1つのテーマを検討したので、11のテーマが実施されたと考えられる。しかしながら、5テーマでは発表がなかった。そのうちの1テーマは他の講義と重なり時間がとれなかったとのことであったが、他の4テーマに関しては発表されなかった理由は不明である。共同研究の発表は1名で行ったので、全部で6件の発表となった。参加者は発表者と教員であったが、発表者以外の大学院生はほとんどおらず、また、教員の参加は領域によりばらつきが目立った。発表後に杉浦社会学研究科長より挨拶があり、修了証を交付し、記念撮影を行った。

杉浦科長は挨拶でプロジェクト科目の意義を述べた。その内容に同意見であるが、重複をいとわず以下に感想を述べる。この科目は既存の枠にとらわれない領域横断的な側面が強調されていた。それゆえ、指導教員以外の教員を担当教員とすることが期待されていた。専門が異なる教員と議論をすることにより、また、異なる領域の研究法を取り入れることにより、大学院生が自らの学問世界を広げることを可能にしようとした。このような試

みが成果を生むには、少なくとも大学院生と教員の双方にこの科目の設置意図に関する明確な意識が必要と思われる。個々の発表の内容に関してはそれぞれ普段の努力のあとがうかがえたが、設置意図の観点からは疑問がないわけではなかった。また、この科目の自由さが手続き面にも及び、研究テーマ、担当教員、講義の実施が必ずしも明確でないことにつながっていた可能性がある。発表者が少なかったこととともに改善すべき点があると考えられる。(小嶋祥三)

A debrief session for Project course 2009 was held on 30th January 2010. Although eleven projects were planned this year, only six presentations were given disappointingly. At the end of the session, certification of Project course 2009 was awarded to each student. However both faculties and students should understand the aim of this course clearly to facilitate interdisciplinary researches.

活動報告

タイトル	開催日・会場	主催・共催・企画	企画者	講演者・参加者
The Aboriginal Press in Canada: Social and Cultural Logic	2009年11月24日 三田キャンパス南館 産業	哲学・文化人類学班	宮坂敬造	Stephen H. Riggins(Memorial University of Newfoundland)
第3回理研主催 人間知性シンポジウム Toward Sustainable Social Systems: Phase transition— Evolution—Polysemy (持続可能な社会システムの構築をめざして: 相転移-進化-多義性)	12月14・15日 日吉キャンパス協生館 藤原洋記念ホール	人間知性研究センター	—	Chris Wood(SFI), Monique van Donzel(NTU), Erling Norrby(KVA,IPL), Luis Bettencourt(LANL,CHC), Michel Hoffman(KNAW,Netherlands), John Holland(Univ.Michigan,SFI), Yilong Yu(NTU), Peter van den Besselaar(Rathenau Institute,IPL), Helena Hong Gao(NTU), Daan Frenkel(University of Cambridge,IPL), Jessica Trancik(SFI), Jan Vabinder(IPL), 入来篤史(理化学研究所 BSI), 安西祐一郎(塾内理工学部), 岡野栄之(塾内医学部), 前野隆司(塾内システムデザイン・マネジメント研究科), 渡辺茂(脳と進化班)
映像人類学とアート 人類学的表現の新天地を求めて ～映像とアートが紡ぐ記録と表現の新たな関係～	12月14日 三田キャンパス東館 6階 G-SECLab	主催: 慶應義塾大学アート・センター 共催: 当拠点 哲学・文化人類学班 協力: 第13回京都大学国際シンポジウム 「学術研究における映像実践の最前線」、 Royal Anthropological Institute、 川崎市市民ミュージアム	宮坂敬造	Karl G. Heider (University of South Carolina)、内田順子(国立歴史民俗学博物館)、村尾静二(総合研究大学院大学)、新井一寛(京都大学)、橋本順一(慶應義塾大学)、宮坂敬造(慶應義塾大学)
人類学的表現の新天地を求めて ～映像とアートが紡ぐ記録と表現の新たな関係～	12月15日 三田キャンパス東館 6階 G-SECLab	主催: 慶應義塾大学アート・センター 企画: 慶應義塾大学内・相互的感情身体知の文化医療人類学・人間科学研究会 当拠点 哲学・文化人類学チーム	宮坂敬造	Karl G. Heider (University of South Carolina)、内田順子(国立歴史民俗学博物館)、村尾静二(総合研究大学院大学)、新井一寛(京都大学)、橋本順一(慶應義塾大学)、宮坂敬造(慶應義塾大学)
感情の人類学: 映像からのアプローチ	12月16日 三田キャンパス東館 4階セミナー室	主催・企画: 慶應義塾大学内・相互的感情身体知の文化医療人類学・人間科学研究会 当拠点 哲学・文化人類学チーム	宮坂敬造	Karl G. Heider (University of South Carolina)、新井一寛(京都大学)、大石高典(京都大学)、宮坂敬造(哲学・文化人類学班)
Kant's Transcendental Idealism in Focus	12月18日: 三田キャンパス東館 4階セミナー室 21日: 三田キャンパス東館 6階 G-SECLab	哲学・文化人類学班 論理・情報班	飯田隆、 Wolfgang Ertl	Lucy Allais(University of Sussex)
言語教育シンポジウム「ことばの力を育む」授業の展開～みんなで探ろう、小学校英語活動への対処法～	12月19日 慶應義塾大学 日吉キャンパス 独立館 DB201 (地下2F)	主催 グローバル COE プログラム 「論理と感性の先端的教育研究拠点」 共催 Project Language Teaching (PLT)、 慶應義塾大学出版会 協賛 (財)ラポ国際交流センター	大津 由紀雄	齋藤菊枝(埼玉県立大宮高等学校教頭)、三森ゆりか(つくば言語技術研究所)、末岡敬明(東京学芸大学附属小金井中学校教諭)、森山卓郎(京都教育大学教授)、窪園晴夫(神戸大学教授)、寺尾康(静岡県立大学教授)、大津由紀雄(言語と認知班)
第3回京都大学・慶應義塾大学 グローバル COE 共催 シンポジウム 子どもの発達と教育～最新の研究成果に学ぶ～	2010年1月9日 三田キャンパス東館 6階 G-SECLab	全体(遺伝・発達班)	山本淳一	子安増生(京都大学グローバル COE)、明和政子(京都大学大学院教育学研究科)、松下佳代(京都大学高等教育研究開発推進センター)、伊藤美奈子(塾内教職課程センター)、渡辺茂(脳と進化班)、皆川泰代、山本淳一、安藤寿康(遺伝と発達班)
日本認知心理学会・慶應義塾大学人文 グローバル COE 共催 認知心理学のフロンティア: 公開シンポジウム I 裁判員裁判における 理性と感性: 裁判長、直感で決めてもいいですか?	1月16日 三田キャンパス北館 ホール	共催: 日本認知心理学会 当拠点	伊東裕司	指宿信(成城大学)、高橋雅延(聖心女子大学)、中村國則(東京工業大学)、綿村英一郎(東京大学)、松尾加代(塾内社会学研究科)、伊東裕司(言語と認知班)
慶應・南フロリダ大学 Joint Seminar	1月15・16日 南フロリダ大学	国際教育研究プログラム委員会	渡辺茂、 ヴォルフガング・エアトル	辻井岳雄、伊澤栄一、田谷文彦(脳と進化班)
こころを生み出す神経基盤の解明	1月26日 三田キャンパス北館 ホール	慶應義塾大学研究推進センター人間知性研究センター 独立行政法人理化学研究所脳科学総合研究センター 慶應義塾グローバル COE プログラム 「幹細胞医学のための教育研究拠点」 プリナストン神経発生・再生学寄附講座 当拠点	—	清家篤(慶應義塾長)、安西祐一郎(塾内理工学部)、伊藤正男(理化学研究所 BSI)、山末英典(東京大学医学部附属病院)、杉本八郎(京都大学大学院)、岡野栄之(塾内医学部)、松沢哲郎(京都大学霊長類研究所)、利根川進(理化学研究所 BSI)、渡辺茂(脳と進化班)
International GCOE Symposium on Neurocognitive Development "Shedding Light on Developing Brain"	1月30日 三田キャンパス東館 6階 G-SECLab	遺伝と発達	山本淳一、 皆川泰代	Emmanuel Dupoux (Director of Laboratoire de Sciences Cognitives et Psycholinguistique, ENS-EHESS-DEC-CNRS, France), Susan Hespous (Associate Professor, Psychology Department, Northwestern University, USA), 保前文高(首都大学東京)、直井望 (Research Fellow of JST, 京都大学)、太田真理子(遺伝と発達班)、辻井岳雄(脳と進化班)
平成21年度 プロジェクト科目報告会	1月30日 三田キャンパス大学 院棟 325 B	教育研究プログラム委員会	杉浦章介、 渡辺茂	プロジェクト科目履修者
平成21年度 若手研究成果報告会	2月1・2日 三田キャンパス北館 大会議室	全体	渡辺茂	石井拓、山崎由美子、加藤真樹、伊澤栄一、染谷芳明、山本絵里子、田谷文彦、辻井岳雄、一方井祐子(脳と進化班)、敷島千鶴、高橋甲介、太田真理子、皆川泰代、佐々木掌子(遺伝と発達班)、佐治伸郎、日根恭子、島田純理(言語と認知班)、石田京子、秋吉亮太、馬場鉄平、鈴木康則、Moháchi, Gergely、星聖子(哲学・文化人類学班)、植村玄輝、串田裕彦(論理・情報班)
Cutting-edge Studies on Infants' Language Development	2月13日 玉川大学 8号館 2F 会議室 2	主催: 玉川大学グローバルCOEプログラム 「社会に生きる心の創成」 共催: 当拠点	今井むつみ	Katerina Kantartzis (University of Birmingham), Henny Yeung (University of British Columbia), Jan-Rouke Kuipers (The ESRC Centre for Research on Bilingualism in Theory and Practice)、岡田浩之、宮崎美智子(玉川大学) 今井むつみ(言語と認知班)
図の推論ワークショップ: 認知科学・論理学・哲学の観点から	2月24日 三田キャンパス東館 4F セミナー室	主催: 慶應義塾大学「論理学とオントロジー」 オープンリサーチセンター 論理学部門 共催: 当拠点論理・情報班	中川純男、 飯田隆	下嶋 篤(同志社大学)、稲岡 大志(神戸大学)、竹村 亮・佐藤 有理・峯島 宏次(論理・情報班)、飯田隆(哲学・文化人類学班)
2009年度 Keio-GachonNRI Joint Symposium	2月27日 三田キャンパス東館 8階ホール	国際教育連携拠点	渡辺茂、 ヴォルフガング・エアトル	Uk-su Choi, Su-Jin Hong, Sang-han Choi, Hyeon-Ae Jeon, Zang-Hee Cho (Gachon University), Shigeru Watanabe, Fumihiko Taya, Satoshi Umeda, Seiji Ogawa, Hideaki Kawabata, Yoshiaki Someya, Yu-ri Terasawa(脳と進化班)

研究員紹介

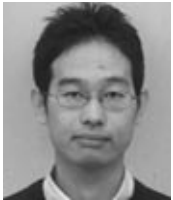


馬場鉄兵

バークリー哲学における意識と外界のつながり

2009年4月より、グローバルCOE非常勤研究員になりました馬場鉄兵と申します。私の研究はジョージ・バークリー(1685-1753)の思想を明らかにすることです。とりわけ、意識と外界に関する彼の見解に関心があります。彼が生きた時代ではニュートンをはじめ、科学が大いに発展しました。しかし、五感によっ

て意識されるもの—とりわけ色・味・匂いといったものは、科学的世界のみに位置づけられませんでした。そうした現象的なものは意識の中のみある主観的なもの・仮象として捉えられるようになりました。バークリーはこうした見解に反対し、現象的なものこそ実在するものであると主張しました。私のこれまでの研究は、彼のこの見解に論理的な不整合がないかどうかを検討することでした。今後は、彼の著作である『視覚新論』に焦点を当て、この見解の意義を、視覚というより具体的な観点から掘り下げていきたいと考えています。



秋吉亮太

今年度から非常勤RA研究員としてお世話になっています哲学・文化人類学班の秋吉亮太です。専門は数学の哲学と証明論を中心とした論理学です。

数学の哲学の代表的な立場に、数学的推論の「論理的」で堅固な面をベースにする形式主義と、より心的な側面ないしは数学的対象の構成という面を重視するいわば「感性的」な面を

重要視する直観主義という対立する二つの立場があります。これまで形式主義と直観主義を哲学・論理学の両面から学際的に研究してきましたが、最近では形式主義的な立場の元で発展してきたヒルベルト以来の証明論(特に三段論法がいらぬことを主張するカット消去定理)を、対立する枠組みである直観主義的立場から再構築するという研究をスタンフォード大学のミンツ先生と共同で進めています。

本プロジェクトのテーマである「論理と感性」というテーマに引き付けて解釈するならば、私の最近の研究は数学的推論における「論理と感性」のバランスを研究しているといえるでしょう。



島田純理

私は昨年の秋に米国MITの言語学博士課程を修了し、12月からCARLSに参加させていただいています。私は言語学の分野の中でも、特に形式意味論やその統語論とのインターフェイスを研究しています。博士論文では、ものの存在を主張する文の意味について取り組みました。従来、このような文の意味は存在量子子を用いることで分析されてきましたが、私はこの

方法では正確に意味を捉えることができない文があることを示し、この問題の解決のため数学の測度論を応用し、存在を主張する文の真理条件をルベグ積分を用いて表す新しい意味論の基礎を完成させました。今後の研究課題は、博士論文では議論できなかったより多様な文の意味も正しく分析できるように、現在の理論を拡張していくことです。これには、時制(テンス)や相(アスペクト)が本質的に関わっていると考えられ、それらの統語論と意味論両面からの解明に取り組んでいます。

事務局だより

活動予定

■ フィクションの哲学

開催日: 2010年3月27日(土)
会場: 三田キャンパス東館4F セミナー室
講演者: 清塚邦彦(山形大学)、森功次(東京大学)、鈴木生郎(塾内文学研究科)、飯田隆(哲学・文化人類学班)

■ 慶應義塾大学グローバルCOEシンポジウム 世界を舞台に成長を続ける若手研究者たち 一次世代を担う若手研究者にグローバルな活躍の場を提供する組織的な取組み—

開催日: 2010年4月17日(土) 11:00~17:30
会場: 慶應義塾大学 三田キャンパス 北館ホール
参加費: 入場無料 参加ご希望の方は事前にお申込ください。
主催: お問合せ: 慶應義塾 研究支援センター本部
<http://www.ora.keio.ac.jp/sympogcoe/>
sympo-gcoe@adst.keio.ac.jp

編集後記 2009年度、最後のNewsletterをお届けします。今号は、12月から2月の活動報告を中心に構成されています。年末年始を挟んだこの時期は、数多くのシンポジウムや若手報告会など、イベントが目白押しでした。その全てを報告することができないのが残念ではありますが、それらのイベントや報告を通じて、本拠点がカバーする研究領域の多様さや研究ネットワークの広さに改めて感嘆しました。今後、さらに学際的な研究を進める上で、Newsletterが潤滑油の役割を果たせればと願います。最後に、ご多忙の中、ご協力頂きました執筆者の方々に、心より感謝申し上げます。(田谷文彦)

新刊本紹介

■ 2009年度成果報告書・活動報告書

2009年度における本拠点の研究成果をまとめた報告書2冊をご紹介します。CARLS Series of Advanced Study of Logic and Sensibility, Vol.3 は事業推進担当者や特別研究教員・研究員、研究協力者らの今年度の研究成果をまとめた論文集(欧文)です。

『論理と感性の先端的教育研究拠点 活動報告書 Vol.3』は、今年度開催したシンポジウム・研究会等の布告と拠点メンバーの著書・論文、学会発表等の業績をまとめたものです。入手方法につきましては、事務局までお問合せください。



慶應義塾大学 論理と感性の先端的教育研究拠点
Centre for Advanced Research on Logic and Sensibility
Newsletter 2010. March. No. 11

発行日 2010年3月25日
代表者 渡辺 茂
〒108-0073 東京都港区三田3-1-7 三田東宝ビル7F・8F
TEL: 03-5427-1156
FAX: 03-5427-1209
keiocarls@info.keio.ac.jp
<http://www.carls.keio.ac.jp/>